

金魚の糞 素晴らしいかな日本」

JH3AEF 東條純一

今年も2月から3月にかけて、JA3VWT中野幸紀教授の主宰する2012年度CRIORブルキナファン現地調査に三度目の参加をさせていただいた。我々アマチュア無線家が同行させていただく主たる目的は、現地でアマ無線局を設営、運用し、出来るだけ多くの現地の人達とアマ無線を通して交流し、出来ればその中からアマ無線を志す人が現れ、運用出来る人が育ち、いずれ何等かの形で有意義に利用されるための礎を築くことである。

しかし、未だにその芽が見えてこないのは、矢張り我々のこの国に対する認識の甘さがあるのだろうか。一考の余地の残るところである。

今回はその滞在中、私が遭遇し、生き恥をさらしたばかりでなく、同行の皆さま、いや、現地の皆さま、現地公機関までにも多大の迷惑をかけてしまった盗難事件と、帰国後、私が経験した日本でのハプニングについての天国と地獄のようなお話である。

今年我々が運用したのは主都ワガドグから西南西に約400Km、ボボデユラソという古都であった。首都ワガドグからの空路は週一便、鉄道も無くもっぱら陸路での移動になる。この陸路は大西洋岸の国々から大陸奥地の国々に向かう物資の重要な補給路であり、この国では最も頼りがいのある移動手段なのだ。(国道1号線 写真寸景) 昨年は未だ未舗装区間もあったが、今年は全区間、舗装が完成していた。どはいうものRIGは大丈夫かなと思われほどの穴ボコ区間と補修区間がイタチごっこの有様だ。

古都ボボには無線連盟会長F. Pooda氏(XT2HB)がかって暮らした持家があり、彼の勤めでこの空家を使わせていただくことになった。昨年の視察時には相当の廃屋に見えたが、彼曰く、たいまいをはたいて改修してくれたい。我々の到着時には見違えるほど美しく改装され、塗料の匂いもすがすがしかった。

locationは街はずれの高台にあり、将来は高級住宅地となる地域なのだろう。周りを見渡せば高い塀をめくらせたこの国ではめったに目にする事のない住居がちりほり、しかしその間には明らかに電線も引き込まれず、土壁、トタン屋根や藁葺の住居が点在する。これらの家々には塀もなければ生垣もない。夕食などは軒先で、子沢山の家族が車座になり明るい内にすませるのが日課のようだ。主婦であるとか、どこからか水瓶や薪を頭にのせ運び込む姿も日課のようだ。道路はやたら幅広く、あちこちに廃材やゴミなどが小山のように積み上げられている。飼主のわからない数頭の山羊がゴミをあさっている。その割に腐敗臭がないのは極度の乾燥のためだろう。腐敗消滅しないビニール類だけが風にまかせて宙を舞う。この国いたる所まで至極当然のように見られる光景だ。パサパサの砂の大地に黒いゴミ袋片が舞い舞いするのだから余計に目につくというのだ。街といえども舗装など一切なく路面はでこぼこ、バイクの後ろに乗せてもらおうものなら、振り落とされないように必死にしがみつかなければならない、決してバイクが猛スピードで走るわけでもないのだが。

それでもここにあるPooda邸は我々ウサギ小屋に住む日本人からみれば確かに邸だ。前庭があり後庭がある。この後庭、定かでないが300坪以上はあるか。びっくした、後庭の中央に魚の形をした穴があるのだ。深さ約2m、体長は10mはあるか。驚くなかれこの魚、google earthでしっかり確認できるときたからただごとではない。Pooda氏、首都の某ホテルのプールサイドで曰く来年には俺の庭のプールモタイルを張って水を入れとくからな。さらに庭にはかつて彼が使っていたタワーもある。二階建て、階下にはラウンジ、食堂、厨房、大きな物置、トイレとシャワールーム、個室が五つ、個室の一つはPooda氏のprivate用、二階には大ホール、彼はここに絨毯を敷きつめクッションを置き畳ルームと呼んだ。



かって私の家の座敷に座ったときの感覚を再現したのだという大きな個室が三つ、個室にはシャワーとトイレのついたものも、広いバルコニーと物置、トイレとシャワー室も、二階へのアプローチは螺旋階段と日本人には何とも羨ましい豪邸である。

しかし生活となると問題山積。蚊の問題、食堂ではハエの問題、いたる所で床を這い回る小さな甲虫類、水圧が低く真夜中にならなければ満足に水の出ない水道、決して口にできない水道水、目と鼻の先にあるモスクから定時に流れるコーランの大音響。極度の乾燥と高温そして砂塵、、、

そのように素晴らしいさや厳しさが入り乱れる環境のもと我々のアマ無線運用は始まった。Pooda氏は我々を送り届けて二日目の午後、数日後に予定されているカンファレンスの準備やpediにきているイタリアチームの世話もあり首都ワガドグに帰っていった。残されたのは我々日本人四名とPooda氏が手配してくれた現地世話係五名、内訳は料理人、便利屋さんとも呼ぼうか何でも簡単にこなすことのできる屈強な男子二名、豪邸の番人、そして通訳にと英語のできるボボ在住の青年医師、その他に日本ブルキナファン友好協会が手配してくれた運転手一名の計六名。しかし知らない間に数名の現地人が加わっていることも、どの顔も黒光り、皆すらっとしてメタボなど知らない人物ばかり、同じような衣類を身にまとひ区別すら難しい。



このような環境のもと事件はPooda氏が現地を離れた翌々日に起った。深夜から翌朝にかけての間に私の貴重品がごっそり無くなったのだ。パスポート、現金、ノートパソコン、USBメモリ、デジカメ、現地で調達した携帯電話、アイポッド。パスポートはコピーし、予備の写真を持ち、カード類は別にするなど、海外でのセキュリティも一応の常識を持っていたにも関わらず全くの不覚であった。何せ知人のお宅という潜在的安心感がスキを作ってしまったに違いない。

その日の午後十時、明日の食糧買付のための現金をコックに支払うため全員が食堂に集まった。私も現金の入ったウエストポーチを持ち支払を済ませた。その場には恐らくすべてのスタッフが顔を連ねていたように記憶する。翌日の予定など話をしてコック、ドライバー、日本人スタッフ4名は夫々の個室に、ガードマンは一階ラウンジに引き下がった。その他のスタッフは夫々帰宅していったように記憶する。私はしばらく自室のRigの前にいたが、パスポート、現ナマ、デジカメ、アイポッドの入ったポーチは衣類で巻いてベッドの枕元に、ノートパソコンは常にベッドの足元に置き、数日後のカンファレンスに備えて開いたり閉じたりしていた。

自室に出入りする扉は二面、何れも同軸が走り、正しくは閉まらない、ましてや自室を出るときに施錠するなどの発想は全く無かった。窓は二面、広大な後庭に面する二階で外部からは容易に侵入できそうにない。

日付の変わるころ15分もかからなかったと記憶するがシャワーのため部屋を離れ階下に降りた。この時、ポーチは衣類に巻いて枕元の定位置のまま、甘いね、金目のものはトランクに、当然施錠もすべきだった。シャワーから帰室後、特に確認もせず爆睡、ベッドは広いものの足元のパソコンをけし落とさないようにと思いつつ眠りに落ちたように記憶するのだが。

爆睡は翌朝5時前から始まるコーランで破られた。洗面は自室ですませ直ちにノートパソコンを開きカンファレンスのおさらいを。しかし、この記憶は定かでない。確か日課ではこのような運びになっていたのだが。その後、午前9時の朝食まで運用を続けるのも日課だった。定刻9時お呼びがかかり全員食堂に。料理人によって毎朝調達される細めのフランスパン、バターに紅茶にコンデンスミルク、新鮮なマンゴウは実に美味しく我々の口に合った。XT初訪問の二人も当地の過酷な環境に次第に順応し食事時徐々には賑やかさを増しつつあった。日本から持参した餅ときな粉を調理人に示し言葉の壁を乗り越え雰囲気はこの上なく良好であったのだが、

食事後、各人はシャックに戻り運用に励む。約1時間はしたるうか。今日の献立と買付のことで再度招集がかかった。



どこかに置き忘れたというような単純なことではないのだから。各々が自分の部屋に駆け戻り所持品の確認をする。幸い事故は私の部屋のみのおぼろげだ。大騒ぎをしているところに通いの面々も集まってくる。

そこで実に奇怪なことが起こった。コックが問題のウエストポーチと小物入れを持ってきたのだ。びっくりしたような形相で厨房の流しの下の小物入れから出てきたと言うのだ。黒いポーチには少し砂がついていたようにみえるが中には何と私のパスポートだけが残っているではないか。小物入れには殺虫剤などを入れていたがそんなものが無くなるはずはない。ただその中からコックが携帯電話のSIMカードを見つけて差し出した。私など何の事かさっぱり理解できずパスポートがあったことだけで頭がいっぱいというか、一瞬、安堵したようにも感じたのだが、SIMカードを残し携帯だけを持ち去る手口は相当のツワモノの仕業というところらしい。昨夜この居宅に滞在したのは、このコック、ガードマン、ドライバーの三現地人と我々日本人四名である。ドライバーは首都ワガドゥに中野団長を迎えるため、早朝に現場を離れ、事件発覚時には既に不在であった。外部侵入者は家屋の構造上考えにくいとなると、考えたくもないがどうしても現地人三名が、といふことになってしまう、実に怖ろしいことだ。

私が見た三名の行動パターンは次のようなものである。ガードマンは真夜中近くに毎日、二階のベランダ、畳ルーム周辺を見回り、ベランダの消灯をする。午前5時ごろ、建物の周りを一巡し点検するような行動をとる。

コックはヘビースモーカーのように見かけた。二階に上がってきたことは終ぞ見かけなかったが事件発覚の朝、螺旋階段の二階上がり框に灰になったタバコの吸い殻を見つけた。しかし、いつの間にか消えていた。

ドライバーは事件発覚の早朝、現場を既に離れ、車でワガドゥに向かったが、数日前のある時、ハッと気が付くと音もなく私のシャック入口のドアのところ立っており、入り先せずゆっくりあたりをみまわし立ち去った。

私が彼らの行動で記憶するのはこのようなことくらいしかない。情報は直ちに首都ワガドゥにいるPooda氏と日本ブルキナファソ協会事務局に報告され、その日の午後、ボボ警察から若い警官と称する男の訪問を受けた。しかしこの男、現地スタッフを一堂に集め、何やら話はしてはいたが30分もしないうちに立ち去った。被害者の私は全く蚊帳の外だった。

理屈は如何にあれ言葉も全く通じない異国の地に私が居ること自体無謀であり、無力であることは当然といえ、反論の余地など全くない。むしろ五体満足で居られることだけでも幸いとしなければならないのだろう。その夜、遅れて入国された中野団長の指示により、翌朝、この街の警察本部に盗難届を出すことになった。後にこの盗難証明が有効に働き帰国後しばらくして現金以外の全てのものが弁済された。

その日の午後、中野団長が到着され正式に警察に告訴することになった。



ここで不幸な事件が発覚した。現金がいるかも知れないと枕元にあるはずのポーチを探すが見つからない。えっ！！！！慌ててトランクの中を引っ掻き回すがあるはずがない。今回は、はなからそこに入れる習慣が無いのだから。大急ぎで各室に散らばった各人にその事を告げる。日本人四名が私のシャックに駆け寄りあちこち探し回るが見つかるはずもない。

直ちに本署の刑事と思われる年配の男が部下を連れて来訪した。事情聴取は現場となった私のシャックでおこなわれた。勿論仏語で行われるため青年医師が通訳してくれた。相当丁寧に聴取はおこなわれ、部下がメモはとっていたが、あたりを立ち見渡すのみで、写真を撮るわけでもなく、指紋を採取するわけでもなく、二、三十分もすると立ち去った。ただ直後に、日本人以外の関係者全員が出頭を命じられ、署内で相当長時間にわたる聴取を受け、コックとドライバーが拘留を命じられた。コックは比較的短期間で釈放されたが、ドライバーの拘留はその後も長期にわたったと聞く。

何十年も昔、わが家が就寝中に盗難に遭った時の日本の警察の行動、家具や扉のいたるところを指紋採取のため真っ白にし、家中写真を撮りまくった記憶に比べると、今回の現地警察の捜査は聴取一本やりであまりにも簡素、一抹の不安を禁じ得ない。盗難事件があっても良からざるが、私自身の平和ボケが引き起こしたと云っても過言ではないこの事件、善意で集まった現地の人々が身に覚えのない事情を聴取されたり、拘留されたりしているのではないかと考えると、何とも身の置き場の無い不安な気持ちになることしばしばである。

帰国して数週間、お山で襖でもと、思い立って白馬八方尾根にスキーに出かけた。学生時代には定宿があり、春夏秋冬足しげく通った思い出の地である。確か社会人になってからも無理して手に入れた「いすゞベレットH600GT」にチェーンを巻き、大雪の中、15時間もかけてようやく細野に乗り込んだこともあった。青木湖畔ではどえらいスリッパをして車をぶっつけてしまったことも、今はどうだ。昼まで仕事をして、明るい内に細野に着くことができる。時代は変わったものだ。

それでも遠見尾根の奥に連なる雪煙舞う白馬三山の稜線はあの頃と寸分変わらず私を迎えてくれた。



(写真、稜線に雪煙舞う白馬三山) 当時中学生だった定宿の岳ちゃんも、早苗さんも、小学生だった雪ちゃんも、夫々お孫さんのある立派な宿のご主人におさまっていた。宿の前で雪かきをしていた岳ちゃんを見つけ、車を降りて「大阪の」まで切り出す前に「東條さん」と帽子をとって手を差し出した。四人で囲んだ食卓では昔懐かしい話が次から次に、良くまあそんな事まで覚えているものだ。開いた口が塞がらなかった。一番こたえたのは早苗さんのひとこと「山から帰ってきた時の東條さん、鼻からデレーンと鼻水を垂らして、帽子からツララを下げて、大きなザック雪だらけにして、アー、山へ行く人はカッコ悪いと思った」とか。

翌日は快晴無風、朝飯もそこそこ一寸奮発して全山共通一日リフト券を買って腕に巻き意気揚々と宿をでた。何十年経とうが方向感覚に狂いはない。ゴンドラ乗り場に直行、リフトを乗り継いで八方リフトコースの最上部へ。学生時代でもリフトを一日に5本も滑るのは相当の「つわもの」といわれた難コース。まあ気負わずにゆっくり下りましょう。浦島太郎よろしくキョロキョロしながらどんどん下る。結構暑い。昔に比べるとコースは拡張され、整備され何とか滑れるではないか。調子に乗ってもう一本。午前中に二本も滑れるとは意外や意外。



これならもう一度ゴンドラに。もう体中汗ビショリである。一寸早いゴンドラ頂上の兎平レストハウスで昼飯に。50年前もこのレストハウスは一寸ハイカラで、関東から来たカッコいいお姉さん達がボルシチを旨そうに食うのを横目に、我々は宿で作ってもらった野沢菜入りの冷たいおにぎりを食べたものだ。今も同じ場所に同じように建つレストハウスだが規模も大きくなり、全く近代的なものに変っている。時間は早いけど昼時でも座席の確保に窮することもなく実に快適だ。話し声から察するに、向こうの席では北欧からの家族連れと思しきグループが兎平に設けられたモーグルコースを滑る連中の姿を見ながら何やら盛んに話し込んでいる。日本のスキー場もインターナショナルになったものだ。快適なエアコンと外から差し込む陽光にヤッケを脱ぎ、セーターも脱ぎ、帽子もとってゆっくり昼飯にありついた。

丁度正午、昼飯客で込む前にレストハウスを出る。今度は昔なかったパノラマコースへ。気温が上がって雪の重くなったコース下部を避け、コースの途中からリフトを利用して再度兎平に戻る予定でリフト乗り場に滑り込んだ。

と、ここで大問題発生。腕に巻きつけていた全山共通一日券が見つからない。左の腕？右の腕？ヤッケのポケット？ズボンのポケット？

雪の上でスキー靴を履き、板をつけでは裸になって探すわけにもいかない。仕方無い。麓まで滑り降り、一旦宿に戻り裸になって探すより方法はあるまい。一気に滑り降りる。計画どう宿で裸になって探すも見当たらない。ここまでして見つからなければどこかで落としてしまったのだろう。さっばり諦めて共通一日券をもう一枚。

岳ちゃん曰く「悪かった、ヤー、悪かったね、東條さん」さてさてゴンドラ乗り場に直行。4本目のリフトを滑るべく兎平へ。駄目もとと思ながらも未練たらしくレストハウス一階のインフォメーションセンターに。

「そのようなお届けはありません」そりゃそりやいな！二階のインフォメーションセンターにも、こちらと同じ回答が。聞くほうがアホやったか！

ハウス内は昼前に比べると人でいっぱい。足は無意識のうちに昼飯を食ったテーブルへ。当然のことながら誰かが腰かけてお茶の最中のお茶だ。

だが待てよ、テーブルの隅にケースに入った共通一日券が！！！！

ツカツカと駆け寄って、「あー、この切符、、、、、」

お茶をしていた彼氏、相棒と相槌を打ちながら曰く

「ああ、この一日券、私の来る前からここにおいてありましたよ、、、、」

あれから何人の人がこのテーブルに座って食事をしたりお茶をしたりしたろう

余分に払うことになった切符代のことなどすっかり吹っ飛んで気分爽快！！

素晴らしい日本。

HFTAによるアンテナ設置場所の評価例

HF Terrain Assessment

その(2)

JA3AOP 杉山 暁

水平アンテナの設置された場所の近傍の地形で垂直指向性が大きく影響を受け、特にアンテナタワー基部から目的方向に下り勾配であることが低角度のGainを増して、DXとのパスを開いてくれることが判りました。

今回は、14MHz 帯で高度100mの地点に高さ16mのアンテナを設置したとき、目的方向への程度の下り勾配が望ましいかを調べてみました。

Fig.1は調べたアンテナの地形断面図です。 青色 :角度 5度の下り坂、赤色 :10度の下り坂、緑色 :高さ116mのタワーアンテナ 水色 :高さ16mの平坦地のアンテナ。

Fig.2 は計算結果です。

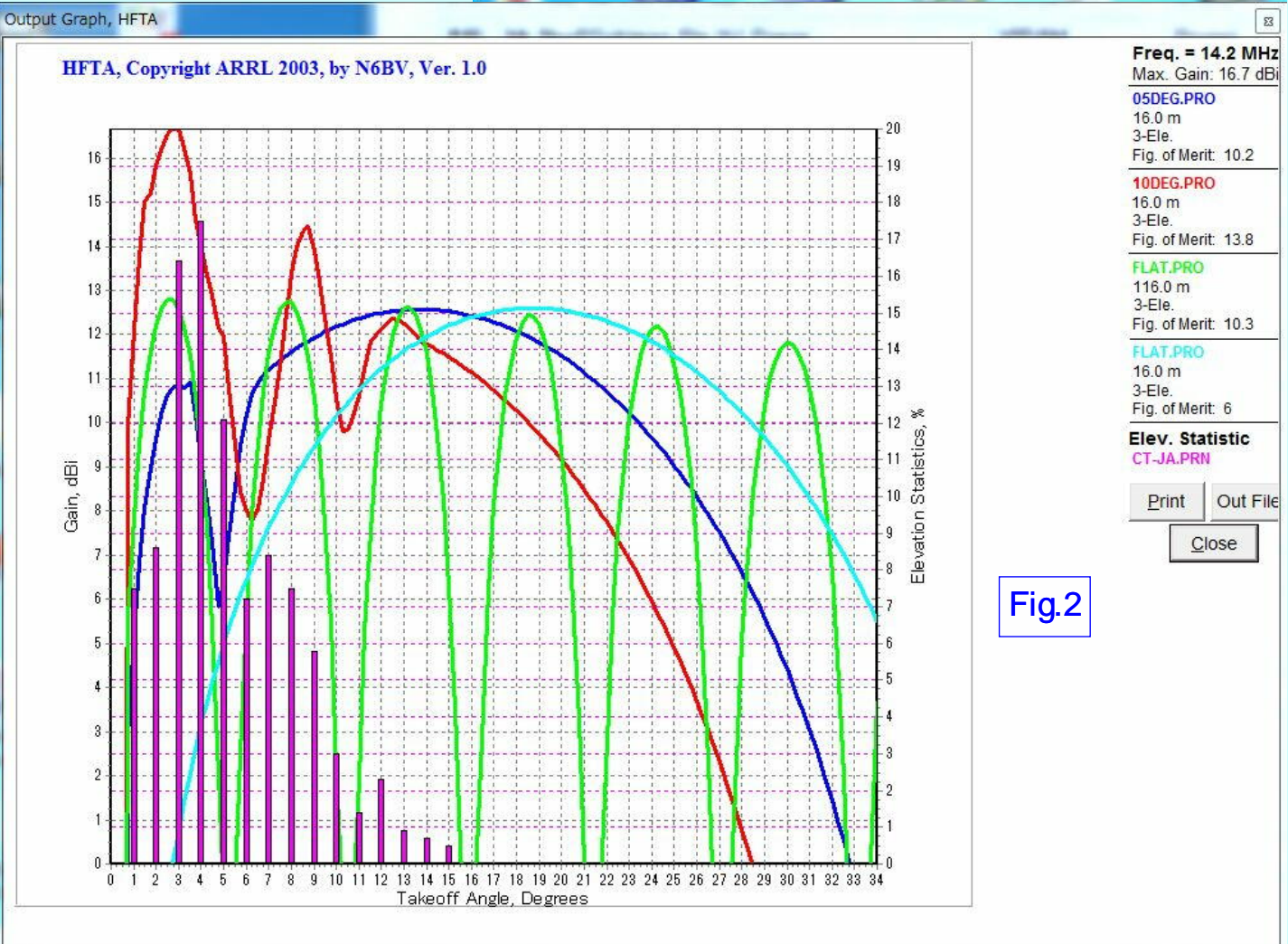
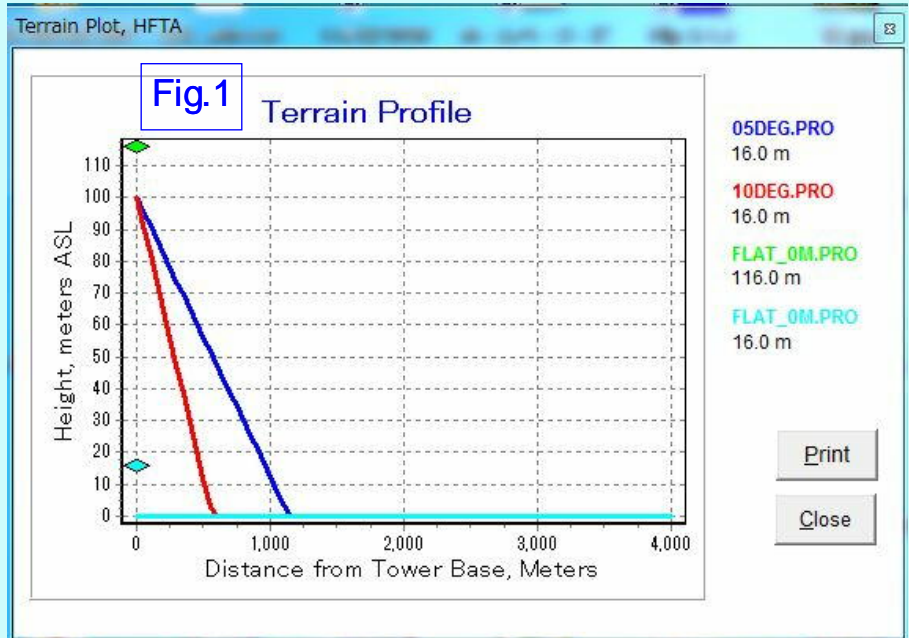
伝播電波のエレベーションの統計データは JA - CT(Portugal) の例を棒グラフで示しています。

このケースでは丘の上のアンテナ、116mのタワーのアンテナが低角度のエレベーションで良好な結果を示しています。

しかし、116mのタワーの場合は地面からの射電波との合成の正位相と逆位相の効果の周期性が強くて、5-6, 9-11, 15-17度ではGainに深いディップがあり これを補完するため、タワーの途中にスタックを入れなければなりません。

平坦地 16mのタワーでは14MHz 帯ではタワーの高さ不足による低角度のGainが不十分です。

角度 10度の下り勾配の丘の上のアンテナはきわめて良好な特性を示しています。



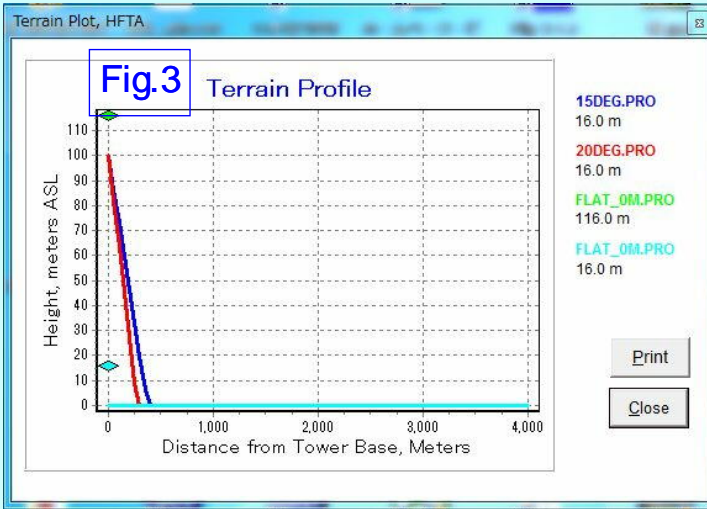


Fig.3

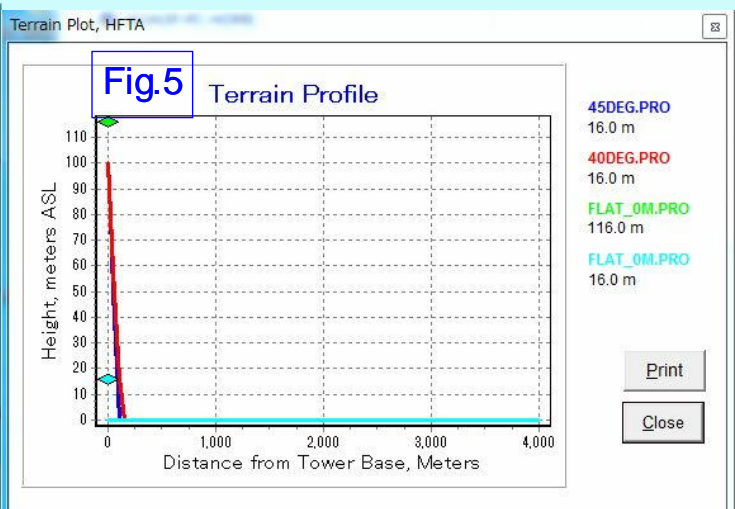


Fig.5

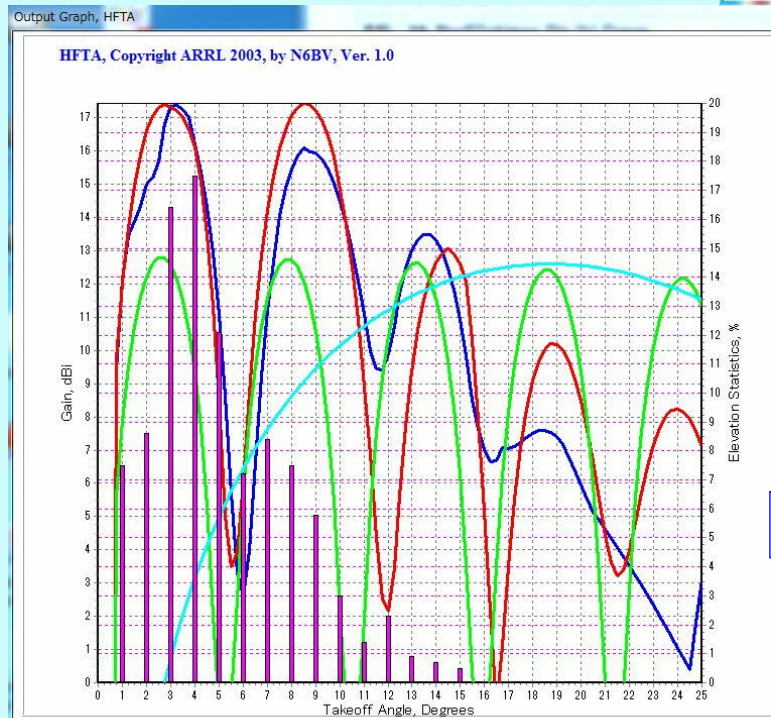


Fig.4

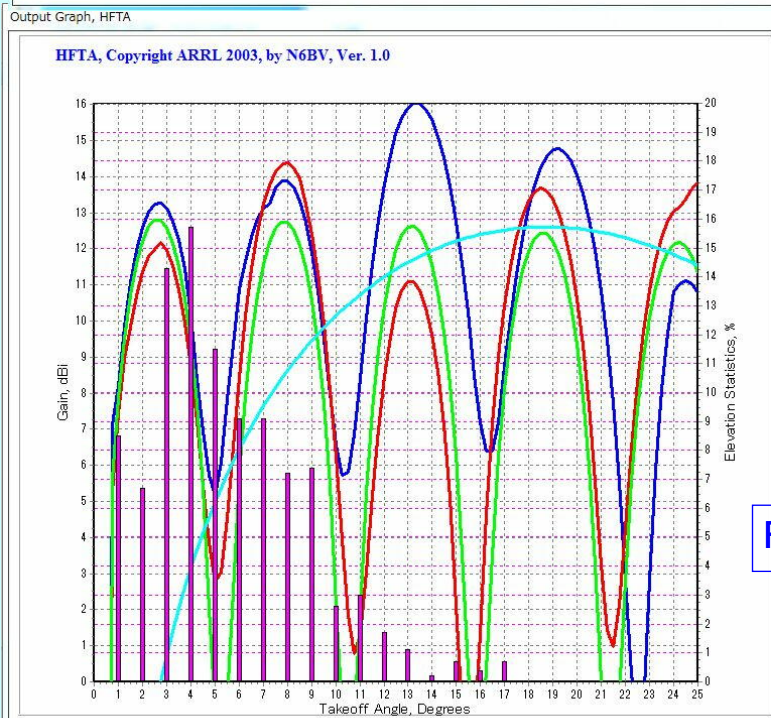


Fig.6

Fig.3, Fig. 5 は夫々勾配 15度、20度と30度、40度の傾斜地の断面図です。Fig.4, Fig. 6 は夫々の計算結果です。

伝播電波のエレベーション統計は Fig. 4では JA-CT を Fig.6 では JA - 6Y(Jamaica) を表示しています。

Fig.4の勾配15度 (青)、20度 (赤)とも低角度では良好な特性ですが、勾配20度ではディップ点が深くなっています。

Fig.6 は勾配30度と勾配40度の計算結果です。青 (30度)も赤 (40度)もディップがありますが、勾配30度のほうがディップが浅く良い結果が出ています。

勾配40度の場合、その垂直面指向性は116mのタワーの特性に近くなりました。40度程度以上の斜面では斜面からの電波の反射は少なくなり斜面の先の平坦地からの反射のみが影響すると考えて良いようです。すなわち、勾配40度以上の傾斜地はその高さの巨大なタワーとみなすことができます。

今回の、試算は周波数を14.2MHzに設定して行いました。周波数を変えれば当然結果は異なります。波長を「長さの基準」と考えれば、7MHz帯では今回の2倍の高さの設定で同じような結果が得られるでしょう。

今回の結果を全体を通して眺めてみると、エレメントをスタックしない小型のタワー場合は、10度~20度程度の丘の上にアンテナを設置するのがもっとも良い性能を引き出せると考えられます。30度、40度といった高傾斜地では垂直指向性の深いディップを補う手段を考える必要があります。この、試算ではタワーは傾斜地の崖っぶちに建っているとしましたが、崖の先端から後退した場合についても考えたいと思っています。